

今日は、仕事の都合で長期間家を空ける両親に代わって、パパの弟にあたる秀夫さんがお家にやってきました。  
私にとって叔父さんにあたりませんが、私が初めて会ったのはまだ赤ちゃんのときだったので、今日が実質の初対面と言ってもおかしくありません。

「は……初めまして、長谷川真琴と言います」

「おお、真琴ちゃんか！ 初めましてっていうわけじゃないけど……にしても、いつの間にか美人になって……ついこの間会ったときは、腕の中にすっぽり収まるくらいだったのに、子供の成長は早いなあ」

「ついこの間って……お前が真琴に会ったのはもう十数年前だろ。むしろ、それで成長してなかったら、こつちが焦る」

「それもそうか！ でも、親と離れ離れになるのは本当に大丈夫か？」



「はい。家のことは大体できますし、それにここでもできた友達と別れるのも嫌なので……」

家を空けるのは仕事のあるパパだけですが、パパは生活能力が全くないので、それをママが支えるために一緒に仕事先に向かうことになっています。本当なら、私もそれについていくべきかもしれませんが、1年と経たずにまたこちらの自宅に戻ってくるらしいので、「それなら一人暮らしでもいいから、ここにいさせてほしい」とパパに頼みました。

しかし、パパとママがそう簡単に了承してくれるはずもなく、話し合いの結果、二人がいない間は叔父さんが保護者として、一緒に暮らすことになりました。



「はー……真琴ちゃんはしっかりしてるなあ。それに、友達と離れたくないって  
気持ちはわからんでもないな。仮について行っても、とんぼ帰りじゃあなあ……」

「本当なら今も連れていきたいんだけどな。真琴の意思も固いみたいで、このまま  
だとがちが明かないから、お前に声を掛けたんだ。こっちの都合を押し付ける形に  
なってしまったてすまん」

「俺の仕事は基本どこでもできるからな。まあそれよりも真琴ちゃんの独り立ちの  
練習として、しっかり面倒みるからこっちのことは心配ないよ」

「独り立ちの練習って……まだ真琴は○学生なんだから、そんな必要はないぞ」



「親バカだなあ……女の子の方が精神的に自立するのも早いんだし、これは娘よりお父さんが子離れできてないってやつか？ 真琴ちゃんも大変だ……」

「叔父さんの言う通りです。パパ……私なら大丈夫だから」

パパよりも大きい叔父さんはちよつと怖い人かと思いましたが、話してみると全然そんなこともなく、目線を合わせて喋ってくれるなど優しい部分も見れて、内心ほつとしたのは内緒です。それよりも、プチ一人暮らし（叔父さんがいるので）の生活が今から楽しみで、ワクワクしています。

「わかってるわかってる。ただし、秀夫の言う事はよく聞くようにするんだぞ？ お小遣いとか、お金関係のことは秀夫に任せるから、あんまり真琴を甘やかさないように頼むぞ」



「この調子なら、心配しなくても兄貴より甘くなることはないだろう？」

「だって……パパ？」

「ここに俺の味方はいないようだな。まあ、それはおいといて、それじゃあ真琴のことをよろしく頼むな、秀夫。真琴も秀夫にあんまり迷惑かけないようにするんだぞ？ 勉強もしつかりするように……あと——」

パパはこの期に及んでも同じことを繰り返し、最終的にはママに引きずられるようにして、家をあとにしていきました。慌ただしいお別れになってしまいました。私と叔父さんの二人きりの生活が幕を開けました。



パパには大丈夫だと言った共同生活ですが、やっぱりあまり良く知らない叔父さんとの生活というのは戸惑いもありました。しかし、叔父さんの生来の人懐っこさのおかげで、気づいたときには夕食後に叔父さんと会話を楽しむくらいの余裕ができていました。

「叔父さんって結婚とかしないの?」

あーっ♡

「結婚なあ……そりやしたいと思うけど、中々簡単にできないのが辛いところだな」

「えーっ……叔父さん、こんなに面白くて優しいのにもったいないよ!」

あーっ♡

「真琴ちゃんにそう言ってもらえると勇氣出るなあ。もうちょつと婚活頑張ってみようかな」



「それにお金もいっぱい持ってる！」

「結局、そこに食いつくんだな！ 真琴ちゃんもなんだかんだ言っつて、女の子だなあ……しっかりしてる。これなら、将来くつつく男のことも心配なさそうだ」

すー

むちゅ

「それ、パパに言ったら泣いちゃうからダメだよ？ 最近なんて、アイドルとか俳優の好きな人をあげるだけで不機嫌になるんだから」

「そりゃあ、可愛い可愛い一人娘だからな。今回の一人でここに残るのも、だいぶ揉めたんだろ？」



「うん……ママもやっぱり反対だったしね。でも、叔父さんがいてくれて本当に良かったよ。じゃないと、こんな生活も絶対できなかつたし」

「まあまだ真琴ちゃんは○学生だからな。それでも、真琴ちゃんがこれまでしっかりしたところを見せてきたから、俺との生活でもオツケーもらえたんだろうし、そこは誇って良いんじゃないか？」

むち♡

「実際、炊事洗濯もちやんとできるし、掃除もやってくれてる。叔父さんが同じ年のころなんて、自分の部屋でさえグツチャグチャだったから、大したものだよ」



「家事するのも嫌いじゃないからね」

「真琴ちゃん、女子力高いな！ まあ女子だから、それが高い事に越したことはないし、俺も助かってるから文句ないけどな。色々と世話することを覚悟してただけに、一緒に暮らしてみてもびっくりしたよ」

す

むち♡

「そんな全然普通のことだよ……えっへん」

「そんな常日頃から頑張ってる真琴ちゃんに、叔父さんが良い物をプレゼントしてあげよう」



そうやって冷凍庫から取り出してきたたのは、人気アイスの新作でした。  
こうやって叔父さんは、何かにつけて甘いものを買ってくるのがしばしば  
あります。

「これ、私が食べたかったやつ！……だけど、叔父さんってば、また甘い物買って  
きて……」

すーっ♡

あ、

あ♡

「いやいや、真琴ちゃん違うぞ。これは俺が食べたいから買ってきたわけではなく、  
日ごろから頑張ってる真琴ちゃんへのご褒美として買ってきたんだ」

「じゃあ、そのアイスは全部私のものなんですか？」



「真琴ちゃん……鬼だな。遠慮ばかりしてた頃が懐かしい……」

「あはははっ……冗談ですよ。でも、本当に食べ過ぎには注意しないと。叔父さんもそうだけど、私だって色んなところにお肉がついたら困るし」

すっ

「むしろ、真琴ちゃんはもうちょっと肉をつけないとダメだと思うけどな。ということ、このアイスを食べようか」

むっ

「またそんなこと言って……私のお腹見たら、びっくりするよ？ でも、アイスは食べる。それ、中々手に入らないやつだし」



「正直で結構。さ、どれでも好きなやつを選んでいいぞ」

あ、ち♡

あ、ち♡

袋の中から取り出されたアイスは、どれも美味しそうなものばかりでしたけど、  
その中でも今一番気になっていた和風テイストのものにしました。  
叔父さんの甘党には困ったものですが、私も甘いものには目がないので、こういう  
ところも距離が縮まる理由だったのかもしれない。



でも、こうやってアイスを食べるとき、叔父さんは必ず二つ目のアイスをすすめてきます。

私も嫌いじゃないので断ることはしませんが、気付かない内に太っていた……という事態にならないか心配です。

「どうだ？ こっちのアイスも美味しいだろ？」

ちゅる

ちゅ♡

「んちゅぶ……ちゅぱっ、じゅる……美味しいけど、毎回二個もアイス食べてたら本当に太っちゃうよ」

ちゅぶ

「心配症だな、真琴ちゃんは……お、そこもつと舐めて……ああ……このアイスはほとんどカロリーゼロだから、どれだけ食べても太る心配はないぞ。むしろ、食べるときの運動でカロリー消費できるくらいだからな」



「本当に?」

「本当、本当……うく、真琴ちゃんももうずいぶんと舌使いがうまくなってきて……叔父さんもすぐにいつちやいそうだ」

ちゅる

ちゅ♡

「だって、このアイス食べるのも初めてじゃないんだから、そりゃあ慣れちやうよ……んちゅる、ちゅこ、ちゅ……こうやって、割れ目のところほじくるとちよつとしよっぱいのが出てくるのも知ってるし」

ちゅん

「あああつ……真琴ちゃん、それも好きだもんな。いっぱい出るから、どんどん食べていいんだよ」



このアイスは甘しよっぱい味が特徴で、一度食べてしまうと病みつきになってしまうものです。

叔父さんはこれを結構な頻度で買ってきてくれるのですが、どこで売ってるのかまでは教えてくれません。

言ってしまうと、私が毎日食べてしまうことでも心配しているのでしょうか？

「真琴ちゃんが、アイスを食べる姿は色っぽいなあ。とても〇学生だとは思えない。結構年上に間違われるんじゃないか？」

「うん……んちゅ、ちゅう……それは結構あるよ。まあ悪い気はしないから良いけどね」

「それに美人さんだから、同年代の男の子にもモテモテなんじゃないか？　もしかして、もう付き合ってたりするのかな？」

ちゅん♡



「んふふふつ……実は気になつてる人はいるんだ。二つ年上の先輩でね……サツカー部に所属してるんだけど、カツヨイイの」

「お、そうなのか。真琴ちゃん、可愛いから……告白したら、うまくいくんじゃないか?」

ちゅる

ちゅる

「んぢゆる、ちゅぽん、ん♥ そう……かな? でも、○学生の間につき合ったりするのはいけないことだし、ちゃんとした恋人を作るのはもつとあとになると思うよ?」

ちゅる

「ああ、そうだった。その通りだ。真琴ちゃんとしては少し残念かな?」



「ちよつとね……でも、気になる程度だし。それよりも告白してくる男子が大変かな……付き合つちやいけけないのに、告白してくるなんてどうしたらいいのか……」

「そうだな……まあしつこい奴がいたら、叔父さんに言つてきなさい。ちやんと解決してあげるから……っ、そろそろアイスが出るよ！」

ち

ッ

「あ、うん♥ 真琴の大好きなアイス、いっぱい食べさせてくださーい♥」

ちゅーぽんぽん

「よしよし、ちやんと台詞も覚えていたんだねっ。じゃあ、出すよ！ ○学生の真琴ちゃんのお口はっ！ くう、射精るっ!!」



